

イエスはこうお答えになった。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

-ヨハネ 12 章-

この時のために

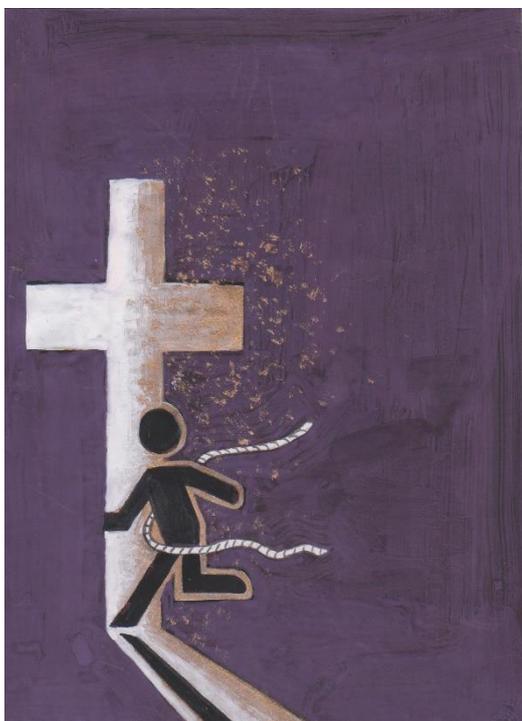
“『父よ、私をこの時から救ってください』と言おうか。しかし、私はまさにこの時のために来たのだ。”

人間としてイエスは、体の死は避けたい。しかし父のもとへ上るために、体は地上に残して逝かなければならない。それが「十字架の道」であることを弟子の前でご自身に言い聞かせます。“一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである”と。

人は、自分の体の死を恐れるがゆえに、心は地に落ちたままで、滅びゆく体を満足させることに全力を注ぎ、他を顧みないで争いの火種を造り、『地球は人類の生活に奉仕するために存在する製品である』とばかりに、わき役であるべき人類が、宇宙の主人公である神を差し置いて、今、地球の危機まで招いているのが、旧約から今日に至るまで、私たち人類の歴史なのです。

神との契約を破って危機に陥るたびに、神は仲介者を遣わし、契約の更新も辞さず、エレミヤにおいてなされた新しい契約が、今日、イエスを仲介者として実現を見たのです。

イエスの祈り“父よみ名の栄光を表してください”は御父に聞き入れられます。み名の栄光とは「救いが全能の神からくる」こと。“私はすでに栄光を表した”とは「御子の従順によって実現した救い」を言い。“再び栄光を表そう”とは「御子に従うものによって実現する私たちの救い」をさしています。



御父と結んだ契約を破った民を再び仲介者を建てた和解によって御父につなぐために、「愛と従順」によって御父とつながっておられる御子イエス。

私たちはこの仲介者イエスに信頼し、イエスを受け入れることで再び御父の慈しみに与るのです。イエスを受け入れるとは、自分の十字架によって体の業を捨て、心で神に向かうことです。

体を捨てても生命を失うわけではありません。体の業に支配されていた今までの生き方に固執するなら、滅びの体のまま命を失い、体の業を無くすことで生命は新しい豊かな実りである命を得るとイエスは私たちを励ましておられます。